

〔論 説〕

孔子の倫理哲学論（5） —道徳論を中心として—

浅 井 茂 紀

目 次

I 序 論

II 本 論

第1節 孔子の安

第2節 孔子の心

第3節 孔子の美

第4節 孔子の楽

第5節 孔子の力

III 結 論

I 序 論

論者は、「孔子の倫理哲学論（５）—道德論を中心として—」と題して論説する。その目次は前記の如しである。そして、「孔子の倫理哲学論（５）」（以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する）の項目や内容の説明や記述はもとよりのこと、且つ、カントの『純粹理性批判』での「哲学する」（philosophieren）⁽¹⁾ ことや異文化で、宗教上のイエス・キリスト（Jesus Christ）の「さばいてはいけません。さばかれないためです。」（マタイ，７—１）⁽²⁾ や「あなたがたがさばくとおりに，あなたがたもさばかれ，あなたがたが量るとおりに，あなたがたも量られるからです。」（マタイ，７—２）⁽³⁾ などとある言葉やキリスト教の根本的原理である「愛」（agapê），これらの認識や意識においても，この論文は，「孔子の倫理哲学論（５）」と題して考察することも可能であろう。

論者は，「孔子の倫理哲学論（４）」⁽⁴⁾，「孔子の倫理哲学論（３）」⁽⁵⁾，「孔子の倫理哲学論（２）」⁽⁶⁾，「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」⁽⁷⁾ などの論説でも，すでに儒教や儒学，孔子（Confucius，552/551—479B.C.）や孟子（Mencius，372—289B.C.）の哲学について多少なりともリサーチ（researches）を实践してきた。

従って，今回もそれらのシリーズ（series）として記述する。今回のこの論説は，以前のそれらの続きでもある。最初に，

１．孔子の安について，安とは何かを問題にする。孔子の性格は，心身ともに安らかであったかどうか，弟子はそれに触れている。さらに，孔子は，国家の諸侯や大夫のあり方として人心の安定の重要視，孔子の仁政哲学を王に採用されることなどを期待している。

２．孔子の心について，心とは何かを問題にする。孔子が，自己の心の欲するままに行為することが普遍的な倫理や道德の基準に合致したのは何歳頃であったか。さらに，弟子の顔回の心はどうであったか。孔子は，四十歳で不惑であったが，孟子は，四十歳で不動心を得たとされる。

３．孔子の美について，美とは何かを問題にする。孔子は，芸術の音楽ではどのようなもの

(1) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865—A838, B866, S. 752—753.

カント『純粹理性批判』（下）篠田英雄訳，岩波書店，昭和41年，128ページ，参照。

(2) 新改訳聖書刊行会『新約聖書，*The New Testament*』（英和対照）日本聖書刊行会，昭和52年，15ページ。
“Do not judge lest you be judged yourselves. (Matthew, 7—1).”

(3) *ibid.*, p.15. “For in the way you judge, you will be judged; and by your standard of measure, it shall be measured to you. (Matthew, 7—2).”

(4) 拙稿「孔子の倫理哲学論（４）—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第46巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2008（平成20）年12月31日発行，1—12ページ。

(5) 拙稿「孔子の倫理哲学論（３）—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第45巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2007（平成19）年12月31日発行，1—12ページ。

(6) 拙稿「孔子の倫理哲学論（２）—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第44巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2006（平成18）年12月31日発行，1—12ページ。

(7) 拙稿「孟子の良心哲学論—良知良能と関連して—」（論説）『千葉商大紀要』第41巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2003（平成15）年12月31日，21—37ページ。また，拙著『哲学要論』，高文堂出版社，2006（平成18）年2月2日，5刷発行，181—223ページ，など。

を美としているか。孔子が尊敬している周公（周公旦）の才能をどう認識していたか。君子の他人に対するあり方、さらに、仁徳の行為がいかなるものかなどを説明する。

4. 孔子の楽について、楽とは何かを問題にする。孔子は、同学同志が遠方から慕ってきて、一緒に研究をどう考慮していたか。知者と愛好者と楽しむ者は等価値であるのか。楽器の演奏だけ良ければ善いのか。また、孟子の「君子の三楽」にも触れてみたい。

5. 孔子の力について、力とは何かを問題にする。孔子は、怪力乱神をどう認識したか。仁の哲学の実行者の存在はどうか。さらに、禹王は、用水路の整備に全力を尽くしていたかどうか。名馬は、何を評価して称賛するのであろうかということなどを説明する。

かくして、中国の春秋時代、聖人・孔子は、何故これら安、心、美、楽、さらに、力などの倫理（Ethics；Ethik；éthique）や道德哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にしてみたい。孔子の倫理的な哲学（Ethical philosophy）は、人間としての基本的な理念（Idee）ではなかろうかと、論者は思考するのである。

次に、Ⅱ 本論 第1節 孔子の安から説明する。

Ⅱ 本 論

第1節 孔子の安

『論語』における孔子の安、すなわち、孔子の言う安とは何かを問題にしてみる。

□□子温にして厲（はげ）し。威ありて猛（たけ）からず。恭にして安し。（述而7），（傍点筆者）⁽⁸⁾。

孔子から受ける弟子の感じをいえば、温厚さの中に、言語のはげしさが有る。威厳はあるが、ただけしさはない。慎み深いが窮屈でなくて、心身ともに安らかである。

従って、この安（yet easy）は、心身ともに安らかな意味であろう。

□□孔子曰く、求、君子は夫の之を欲すと曰うを舍きて、必ず之が辭を爲すを疾む。丘や聞く、國を有（たも）ち家を有つ者は、寡を患えずして均しからざるを患う。貧を患えずして、安からざるを患うと。蓋し均しければ貧無く、和すれば寡無く、安ければ傾くこと無し。（季氏16）⁽⁹⁾。

孔子は言う、求（冉有）よ、君子は、欲しいのに欲しいといわずに、あれこれと弁解の辭を設けるものをにくむ者である。丘（孔子）は、こういうことを聞いている。國を保有している諸侯や家を保有している大夫は、その物資の乏しいのを憂えずして、人民への配分の均等でないのを憂え、人民の生活の貧困を憂えずして、人心の安定しないのを憂えよ、

(8) 子温而厲（れい）。威而不猛。恭而安。（述而7），（傍点筆者）。

宋朱子（朱熹）集註『四書集註』香港太平書局，1964年，論語卷之四，述而第七，49ページ。宋朱子（朱熹）集註『四書集註』台湾中華書局，中華民國66年，論語卷四，述而第七，9ページ。

慧豐學會『漢文大系』（一），新文豐出版公司，中華民國83年，論語集說，卷2，述而第7，85ページ。四部叢刊經部。『漢文大系』壹（大學說，中庸說，論語集說，孟子定本），富山房，明治43年，論語集說，卷2，述而第7，85ページ。

(9) 孔子曰、求、君子疾夫舍曰欲之、而必爲之辭。丘也聞、有國有家者、不患寡而患不均。不患貧、而患不安。蓋均無貧、和無寡、安無傾。（季氏16）。

と。私が思うに、人民の生活が均等であれば、自分だけが貧乏だという感じがなくなり、人民が相和合すれば、人口の少ないことは心配する必要はないし、人心が安定すれば、国や家がくつがえり滅亡する心配もない⁽¹⁰⁾。この安は、人心の安定 (repose) の意味である。□□子曰く、夫 (か) の稲を食い、夫の錦を衣るは、女 (なんじ) に於いて安きかと。曰く、安しと。女安くば則ち之を爲せ。夫 (そ) れ君子の喪に居る、旨きを食えども甘からず。樂を聞けども樂しまず。居處安からず。故に爲さざるなり。今女安くば則ち之を爲せと。宰我出づ。(陽貨17)⁽¹¹⁾。

孔子は、弟子の宰我から三年の喪は長すぎるので一年でどうかという質問に対して、孔子が反発した言葉である。なぜならば、孔子は、子供は生まれて三年で父母の懷から離れるので、両親の恩情に報いるために三年の喪の制度があるという理由からである。ここでの安 (feel at ease), すなわち、安きかとは、心安くできるのか、と否定の意味であろう。但、安それ自体は、安心の意義である。なお、『論語』には、「安き」や「安んず」とか、「安 (いづく) に」と読む例も存在する⁽¹²⁾。

次に、孟子の安に関して、

□□王如し予を用いば、則ち豈徒 (あにただ) 齊 (せい) の民安きのみならんや。天下の民舉 (みな) 安からん。王庶幾 (こいねがわ) くは之を改めよ、と。(公孫丑下)⁽¹³⁾。

この安は、安らかの意味であり、人々が王道政治により、安心することである⁽¹⁴⁾。

ゆえに、孔子の安では、孔子は、「恭にして安し。」(述而7) などとあるように、哲学者・孔子自身が心身ともに安らか (yet easy) であり、さらに、人心の安定 (repose), 安心などの意味がある。次に、孟子の安については、「天下の民舉安からん。」(公孫丑下) などとあり、安らか、安心 (ease; happiness) などの意義があると、論者は思考するのである。

第2節 孔子の心

『論語』における孔子の心、すなわち、孔子の言う心とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、吾十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従えども、矩 (のり) を踰 (こ) えぬ。(為政2), (傍点筆者)⁽¹⁵⁾。

聖人・孔子は、七十歳になって、自己の心の欲するままに行動や行為することが、いつ

(10) 吉田賢抗『論語』(新釈漢文大系, 第1巻) 明治書院, 昭和35年, 360ページ。

(11) 子曰く、食夫稲、衣夫錦、於女安乎。曰、安。女安則爲之。夫君子之居喪、食旨不甘。聞樂不樂。居處不安。故不爲也。今女安則爲之。宰我出。(陽貨17)。

(12) 安 (やす) き、と読む例、「子曰く、君子食無求飽、居無求安。」(學而1)。

安 (やす) んず、と読む例、「仁者安仁、知者利仁。」(里仁4)。

さらに、安 (いづく) に、と読む例には、「安見方六七十、如五六十、而非邦也者。」(先進11)、等々が存在する。

(13) 王如用予、則豈徒齊民安。天下之民舉安。王庶幾改之。(公孫丑下)。

(14) 内野熊一郎『孟子』(新釈漢文大系, 第4巻) 明治書院, 昭和37年, 152ページ。

(15) 子曰く、吾十有五而志於學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。(為政2), (傍点筆者)。

でも倫理や道徳の基準に合致して、規範や道理にはずれることがなかったと言う。

この心 (my heart) とは、孔子自身の心である。その心の欲するままに行為することが倫理や道徳の基準に合致して、のりや規範にはずれることがなかったという。

□□子曰く、回や、其の心三月 (さんげつ) 仁に違 (たが) わず。其の餘は則ち日月 (じつげつ) に至るのみと。(雍也 6)⁽¹⁶⁾。

孔子が言う、顔回は、幾月にも久しく、彼の心 (his mind) が倫理的な仁の行為に違うことはない。しかし、その他の連中は、日に一度や月に一度、時折、その仁の行為に至り得るだけにすぎない。

ここでの心は、孔子が言うには、弟子の顔回 (顔淵) の心は、長く久しく心が倫理的な仁の行為に違うことはない、という意味である。

□□子曰く、飽食終日、心を用いる所無きは、難 (かた) いかな。博奕 (ばくえき) なる者有らずや、之を爲すは猶已 (や) むに賢 (まさ) れり。(陽貨17)⁽¹⁷⁾。

孔子が言う、飽きる程食べて、一日中、何も心 (his mind) を用いることもないことは、人間として困難だなあ。世間には博奕、すなわち、双六とか囲碁というものがあるではないか。そんな勝負事をしていても、何もしないよりは、なおましである。

ここでの心は、反対に、一日中、何も心を用いることもないことの意味であろう。心の活用の重要性に対して、逆に、もし心を用いることがないことは人として困難なことをいう。次に、孟子の心に関して、

□□孟子曰く、否。我四十にして心を動かさざりき、と。(公孫丑上)⁽¹⁸⁾。

孟子は、四十歳で不動心 (apatheia) を獲得した。さらに、孟子は、論敵の告子も四十歳で不動心を獲得したと是認している。

□□孟子曰く、仁は人の心なり。義は人の路なり。(告子上)⁽¹⁹⁾。

孟子が言う、仁は人の心に本来からあるもの、人の本心である⁽²⁰⁾。

ゆえに、孔子の心では、聖人・孔子は、「七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず。」(為政 2) とあるように、孔子自身、彼の心 (his heart) の欲するままに行為することが倫理や道徳の基準に合致して、のりや規範にはずれることがなかったということである。さらに、「子曰く、回や、其の心三月仁に違 (たが) わず。」(雍也 6) などとあり、孔子は、弟子の顔回 (顔淵) の心は、長く久しく心が倫理的な仁の行為に違うことはない、などという意味である。次に、孟子の心については、「孟子曰く、否。我四十にして心を動かさざりき、と。」(公孫丑上) とあるように、至聖・孟子は、四十歳で不動心 (apatheia) を獲得したことなどであると、論者は思考するのである。

(16) 子曰、回也、其心三月不違仁。其餘則日月至焉而已矣。(雍也 6)。

(17) 子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉。不有博奕者乎、爲之猶賢乎已。(陽貨17)。

(18) 孟子曰、否。我四十不動心。(公孫丑上)。

(19) 孟子曰、仁、人心也。義、人路也。(告子上)。

(20) 注(14)参照。内野熊一郎、前掲書、400ページ。

第3節 孔子の美

『論語』における孔子の美、すなわち、孔子の言う美とは何かを問題にしてみる。

□□子韶を謂う、美を盡（つく）せり。又善を盡せり。武を謂う、美を盡せり。未だ善を盡さざるなり。（八佾 [いつ] 3）、（傍点筆者）⁽²¹⁾。

孔子は、舜の音楽である韶を批評して、「美をつくしている。又善をつくしている。」といった。さらに、武王の音楽である大武を批評して、「美をつくしている。しかし、まだ善をつくしていない」といった。舜は平和的な政治であり、武は武力的な政治なので、善美の相違をなしたといえよう⁽²²⁾。ここでは、孔子は、舜の音楽や武王の音楽は美（perfectly beautiful）をつくしていると是認している。

□□子曰く、如し周公の才の美有るも、驕且つ吝ならしめば、其の餘は觀（み）るに足らざるのみ。（泰伯 8）⁽²³⁾。

孔子が言う、もし、周公（周公旦）ほどの完全な美しい才能があったとしても、仮に他人に対して驕慢且つ吝嗇、情や誠を出し惜しみする心があったならば、それ以外の美徳も觀るに足りないものである。

この美は、周公（周公旦）ほどの完全な美しい才能を意味する。

□□子曰く、君子は人の美を成して、人の惡を成さず。小人は是に反す。（顔淵12）⁽²⁴⁾。

孔子が言う、君子は他人の美しい善い事や成功を喜び成し遂げるように願ひ、他人の惡事をしないようにする。小人はこれに反して、他人の美を妬む傾向がある。

この美は、君子は他人の美しい善い事や成功を喜び成し遂げるように願うことである。

□□子曰く、仁に里るを美と爲す。擇（えら）びて仁に處らずんば、焉（いづく）ぞ知たるを得ん。（里仁 4）⁽²⁵⁾。

孔子が言う、自分の身を仁という場所におく、つまり、仁徳を行為の拠り所とするのが美しい（virtuous manners）ことである。なお、『論語』には、「美目」や「美玉」の熟語が存在する⁽²⁶⁾。次に、孟子の美について、

□□今王此（ここ）に田獵（でんりょう）せんに、百姓王の車馬の音を聞き、羽旄（うぼう）の美を見、舉（みな）欣欣然（きんきんぜん）として喜色有り、而して相告げて曰く、吾が王疾病無きに庶幾（ちか）からんか。（梁惠王下）⁽²⁷⁾。

羽旄の美とは、王者の車に立てた雉の羽と牛の尾の旗の美しい意味であろう。

□□孟子曰く、牛山の木嘗て美なりき。（告子上）⁽²⁸⁾。

孟子が言うに、牛山という山の草木は、昔は美しく繁っていた、と。

(21) 子謂韶，盡美矣。又盡善也。謂武，盡美矣。未盡善也。（八佾 [いつ] 3）。

(22) 注10参照。吉田賢抗，前掲書，83ページ。

(23) 子曰，如有周公之才之美，使驕且吝，其餘不足觀也已。（泰伯 8）。

(24) 子曰，君子成人之美，不成人之惡。小人反是。（顔淵12）。

(25) 子曰，里仁爲美。擇不處仁，焉得知。（里仁 4）。

(26) 子夏問曰，巧笑倩兮（せんけい），美目盼兮（げいけい），素以爲絢兮（けんけい），何謂也。子曰，繪事後素。曰，禮後乎。子曰，起予者。商也始可與言詩已矣。（八佾 [いつ] 3）。この節に「美目」の熟語があり，さらに，子貢曰，有美玉於斯。（子罕 9）と有り，この節に「美玉」等の熟語がある。

(27) 今王田獵於此，百姓聞王車馬之音，見羽旄之美，舉欣欣然有喜色，而相告曰，吾王庶幾無疾病與。（梁惠王下）。

(28) 孟子曰，牛山之木嘗美矣。（告子上）。

なお、孟子には、宮室之美（告子上）や五穀者、種之美（告子上）⁽²⁹⁾ などもある。

ゆえに、孔子の美では、「子韶を謂う、美を盡（つく）せり。又善を盡せり。」（八佾 [いつ] 3）とあり、孔子は、舜や武王の音楽は美（perfectly beautiful）をつくしているとしている。さらに、周公（周公旦）ほどの美しい才能や君子が人の美しい善い事や成功を成し遂げるように願うことが美であり、自分の身を仁という場所におく、つまり、仁徳を行為の拠り所とすることなどが美しいことの意味としている。

次に、孟子における美では、「百姓王の車馬の音を聞き、羽旄（うぼう）の美を見」（梁恵王下）などとあり、旗の美しいことや、牛山の草木は、昔は美しく繁っていたことなどの意義であると、論者は思考するのである。

第4節 孔子の楽

『論語』における孔子の楽、すなわち、孔子の言う楽とは何かを問題にしてみる。

□□子曰く、學びて時に之を習う、亦説（よろこ）ばしからずや。朋、遠方自（よ）り来る有り、亦樂しからずや。人知らざるも慍（うら）みず、亦君子ならずや。（学而1）、（傍点筆者）⁽³⁰⁾。

孔子が言う、学問を常に学習していることは、なんとよろこびであり嬉しいことではないか。自然に同学同志が、遠方から慕ってきて、一緒に研究するようになる。これはなんと楽しい（delightful）ことではないか、と⁽³¹⁾。

□□子曰く、之を知る者は、之を好む者に如（し）かず。之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。（雍也6）⁽³²⁾。

孔子が言う、知るという者よりは、愛好者に及ばない。愛好者よりは、これを楽しむ者に及ばない、と。知者や愛好者よりも、楽しむ者が上である。

□□子曰く、知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ。知者は動き、仁者は静かなり。知者は楽しみ、仁者は壽（いのちなが）し。（雍也6）⁽³³⁾。

孔子が言う、知者は水を楽しみ（joyful）、知者は動き、変化の中で楽しむ。仁者は山を楽しむ、静的なので長寿を保持する、と。動的な知者は水を楽しみ、静的な仁者は山を楽しむという意味である。

□□子曰く、禮と云い、禮と云う、玉帛を云わんや。樂と云い、樂と云う、鐘鼓を云わんや。（陽貨17）⁽³⁴⁾。

孔子が言う、礼、礼というのが、礼物としての玉帛の良否や多少であらうか。そうではなく、礼の根本は心からのうやまいにある。楽、楽というのが、鐘や太鼓の楽器の演奏をいう

(29) 爲宮室之美，妻妾之奉，所識窮乏者得我與。（告子上）。

この節に「宮室之美」の熟語があり、さらに、孟子曰く、五穀者、種之美者也。（告子上）、と有り、この節に「種之美」の熟語がある。種之美とは、五穀は、種子の中ですぐれているということである。

(30) 子曰、學而時習之、不亦説乎。有朋自遠方來、不亦樂乎。人不知而不慍、不亦君子乎。（学而1）、（傍点筆者）。

(31) 注(10)参照。吉田賢抗、前掲書、13ページ。

(32) 子曰、知之者、不如好之者。好之者、不如樂之者。（雍也6）。

(33) 子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。（雍也6）。

(34) 子曰、禮云、禮云、玉帛云乎哉。樂云、樂云、鐘鼓云乎哉。（陽貨17）。

のであろうか。そうではなく、心の和楽が真実の楽であらう、と。楽（music）といっても、鐘や太鼓の楽器の演奏をいうのではなく、心の和楽が本当の楽という。なお、『論語』には、「禮樂」、「三樂」や「驕樂」、「宴樂」や「雅樂」の熟語も存在する⁽³⁵⁾。次に孟子の楽に関して、まず、孟子の「君子の三樂」について、

□□孟子曰く、君子に三樂有り。而して天下に王たるは與（あずか）り存せず。

父母俱（とも）に存し、兄弟故きは、一の楽しみなり。

仰ぎて天に愧（は）じず、俯（ふ）して人に忤（は）じざるは、二の楽しみなり。

天下の英才を得て、之を教育するは、三の楽しみなり。

君子に三樂有り。而して天下に王たるは與り存せず、と。（尽心上）⁽³⁶⁾。

孟子は、天下の英才を得て、これを教育するは、三の楽しみとしている⁽³⁷⁾。

□□孟子曰く、萬物皆我に備わる。身に反して誠なれば、楽しみ焉（これ）より大なるは莫（な）し。（尽心上）⁽³⁸⁾。

孟子が言う、自分自身に反省してみても、誠実であれば、これほど大きい楽しみはない、と。

ゆえに、孔子の楽では、孔子は、「朋、遠方自り來る有り、亦樂しからずや。」（学而1）と言ひ、哲学的な同学同志が、遠方から慕ってきて、一緒に研究するようになる。これはなんと楽しい（delightful）ことではないか、としている。さらに、単なる知者や愛好者よりも、楽しむ者が上であり、動的な知者は水を楽しみ（joyful）、静的な仁者は山を楽しむとされる。また、音楽（music）では、鐘や太鼓の楽器の演奏よりも、心の和楽が本当の楽などという意味である。

次に、孟子の楽では、有名な「君子の三樂」や我が身に反省して、誠実であれば、大きな楽しみなどの意義があると、論者は思考するのである。

第5節 孔子の力

『論語』における孔子の力、すなわち、孔子の言う力とは何かを問題にしてみる。

□□子、怪・力・亂・神を語らず。（述而7），（傍点筆者）⁽³⁹⁾。

孔子は、怪談、力ある武勇伝、背徳や鬼神などは、あまり語ることがなかった⁽⁴⁰⁾。

⁽³⁵⁾ その他、「禮樂」、「三樂」、「驕樂」、「宴樂」、「雅樂」、について、
「子曰、先進於禮樂、野人也」。（先進11）。さらに、
「孔子曰、益者三樂、損者三樂。（中略）樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂損矣」。（季氏16）、
「子曰、惡紫之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。」。（陽貨17）、等々。

⁽³⁶⁾ 孟子曰、君子有三樂。而王天下不與存焉。
父母俱存、兄弟無故、一樂也。
仰不愧〔はじ〕於天、俯不忤〔はじ〕於人、二樂也。
得天下英才、而教育之、三樂也。
君子有三樂。而王天下不與存焉。（尽心上）。

⁽³⁷⁾ 拙著『教育哲学要論』、第2節教育の語源、高文堂出版社、2002（14）年4月1日発行、14ページ。

⁽³⁸⁾ 孟子曰、萬物皆備於我矣。反身而誠、樂莫大焉。（尽心上）。

⁽³⁹⁾ 子不語怪・力・亂・神。（述而7），（傍点筆者）。

⁽⁴⁰⁾ 注10参照。吉田賢抗、前掲書、162ページ。

□□子曰く、射は皮を主とせず。力を爲すに科を同じくせず。古の道なり。(八佾 [いつ] 3)。(傍点筆者)⁽⁴¹⁾。

孔子が言う、古の射は礼儀正しさが大事で、的にあたることを主としなかった。又、民の力役をなす割り当てに差を設けて、一様に仕事をなさなかった。これが古の道である⁽⁴²⁾。ここでの力は、民の力役を意味する。

□□能く一日も其の力を仁に用いること有らんか、我未だ力の足らざる者を見ず。蓋(けだ)し之有らん。我未だ之を見ざるなり。(里仁 4)⁽⁴³⁾。

孔子は、一日だけでも自分の力を仁に用いようと心がける者があれば、我はまだ力が足りないという者を見たことがない。この力 (his strength)⁽⁴⁴⁾ は、仁の哲学を実行する力であろう。

□□宮室を卑しくして、力を溝洫(こうきょく)に盡(つく)す。(泰伯 8)⁽⁴⁵⁾。

禹王は、自分の住居を簡素にして、溝洫、つまり、田畑における灌漑の用水路⁽⁴⁶⁾、その整備に全力を尽くしていると孔子は述べている。

□□子曰く、驥(き)は其の力を稱せず。其の徳を稱するなり。(憲問14)⁽⁴⁷⁾。

孔子が言う、名馬は、一日に千里を走るという力のあることなくして、良馬としての徳を称賛するのである、と。なお、『論語』には、「余力」という熟語もある⁽⁴⁸⁾。

次に、孟子における力について、

□□孟子曰く、力を以て仁を假(か)る者は霸たり。霸は必ず大國を有つ。徳を以て仁を

(41) 子曰、射不主皮。爲力不同科。古之道也。(八佾 [いつ] 3)。

(42) 注10参照。吉田賢抗、前掲書、74ページ。

(43) 有能一日用其力於仁矣乎、我未見力不足者。(里仁 4)。

(44) James Legge, *THE CHINESE CLASSICS, CONFUCIAN ANALECTS, THE GREAT LEARNING, THE DOCTRINE OF THE MEAN, THE WORKS OF MENCIOUS*, Southern Materials Center, Inc., Taipei, 1985, p.167. レッグは、この書 (*THE CHINESE CLASSICS*) で、『論語』(CONFUCIAN ANALECTS) のこの節(里仁 4)を以下の如く訳している。

‘Is any one able for one day to apply his strength to virtue?’

I have not seen

the case in which his strength would be insufficient.

なお、James Legge は、

安⇒yet easy, repose, feel at ease,

心⇒my heart, his mind,

美⇒perfectly beautiful, perfect the admirable qualities, virtuous manners,

樂⇒delightful, pleasure, joyful,

力⇒feats of strength, people’s strength, his strength, its strength, etc.

と訳している。

(45) 卑宮室、而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。(泰伯 8)。

(46) 注10参照。吉田賢抗、前掲書、190ページ。

溝洫(こうきょく)とは、田畑の間にあるみぞや水路である。井田法では、一井(日本の四町四十八間四方)は九百畝である。その井と井との間に水路が出来るが、それを溝(こう)という。十里四方を成(日本の一里十二町四方)というが、成と成との間の水路を洫(きょく)といったようである。

(47) 子曰、驥不稱其力、稱其徳也。(憲問14)。

(48) 「余力」についての例、「子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。」(学而 1)。この節に「余力」の熟語がある。

行う者は王たり。王は大を待たず。(公孫丑上)⁽⁴⁹⁾。

孟子が言う、力づくでやり、慈愛的に見せかける者は覇者である。覇者は必ず大国を有する必要がある。反対に、倫理や道徳的な仁徳で政治を実行するのは王者である。

□□心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人に治めらる。(滕[とう]文公上)⁽⁵⁰⁾。

孟子は、心を勞する者は人を治め、力を勞する者は人から治められる者である、と述べている。

□□智は、譬えば則ち巧なり。聖は、譬えば則ち力なり。(万章下)⁽⁵¹⁾。

弓術でたとえると、智は、譬えば弓を引く技術であり、聖は、譬えば弓を引く力なのであると孟子は語っている。

なお、『孟子』書には、「目力」、「耳力」や「心力」、「人力」、「民力」や「力役之征」などの熟語がある⁽⁵²⁾。

ゆえに、孔子の力では、「子、怪・力・亂・神を語らず。」(述而7)などとあるように、怪力乱神はあまり語らなかったが、それでも、その力ある武勇伝、力役、倫理や道徳哲学的な仁政を実行する力(strength)、用水路の整備に全力を尽くすことや名馬は、その徳を称賛するが、一日に千里を走るという力などの意味がある。さらに、「余力」の熟語も存在する。

また、孟子における力に関しては、「聖は、譬えば則ち力なり。」(万章下)とあり、聖は、譬えば弓を引く力であり、仁徳の王者ではなく覇者の力づくや心を勞する者に対しては力を勞する者などの意義であると、論者は思考するのである。

Ⅲ 結 論 [孔子の倫理哲学論(5) —道徳論を中心として—]

[1] 孔子の安では、孔子は、「恭にして安し。」(述而7)などとあるように、哲学者・孔子自身が心身ともに安らか(yet easy)であり、さらに、人心の安定(repose)、安心(ease)などの意味がある。次に、孟子の安については、「天下の民舉安からん。」(公孫丑下)などとあり、安らか、安心などの意義があると、論者は思考するのである。

[2] 孔子の心では、聖人・孔子は、「七十にして心の欲する所に従えども、矩を踰えず。」(為政2)とあるように、孔子自身、その心(his heart)の欲するままに行為することが倫理や道徳の基準に合致して、のりや規範にはずれることがなかったということである。さらに、「子曰く、回や、其の心三月仁に違わず。」(雍也6)などとあり、孔子は、弟子の顔回(顔淵)の心(his mind)は、長く久しく心が倫理的な仁の行為に違うことはない、などという意味である。次に、孟子の心については、「孟子曰く、否。我四十にして

(49) 孟子曰、以力假仁者霸。霸必有大國。以德行仁者王。王不待大。(公孫丑上)。

(50) 勞心者治人、勞力者治於人。治於人者食人、治人者食於人。天下之通義也。(滕[とう]文公上)。

(51) 智、譬則巧也。聖、譬則力也。(万章下)。

(52) 「目力」や「耳力」(離婁上)について、

「聖人既竭目力焉、繼之以規矩準繩。以爲方員平直、不可勝用也。既竭耳力焉、繼之以六律。」(離婁上)。

「心力」の例、「盡心力而爲之、後必有災。」(梁惠王上)。

「人力」の例、「人力不至於此。」(梁惠王下)。

その他、「民力」、等が存在する。

心を動かさざりき、と。」(公孫丑上)とあるように、堯聖・孟子は、四十歳で不動心(apatheia)を獲得したことなどの意義であると、論者は考えるのである。

[3] 孔子の美では、「子韶を謂う。美を盡せり。又善を盡せり。」(八佾 [いつ] 3)とあり、孔子は、舜や武王の音楽とも美(perfectly beautiful)をつくしているとしている。さらに、周公(周公旦)程の美しい才能や君子が人の美しい善い事や成功を成し遂げるように願うということが美であり、自分の身を仁という場所におく、つまり、仁徳を行為の拠り所とするのが美しい(virtuous manners)などの意味としている。

次に、孟子における美では、「百姓王の車馬の音を聞き、羽旄(うぼう)の美を見」(梁恵王下)などとあり、旗の美しいことや、牛山の自然な草木は、昔は美しく繁っていたことなどの意義であると、論者は思考するのである。

[4] 孔子の楽では、孔子は、「朋、遠方自り来る有り、亦樂しからずや。」(学而1)と言い、哲学的な同学同志が、遠方から慕ってきて、一緒に研究するようになる。これはなんと楽しい(delightful)ことではないか、としている。さらに、単なる知者や愛好者よりも、楽しむ者が上であり、動的な知者は水を楽しみ(joyful)、静的な仁者は山を楽しむとされる。音楽(music)では、鐘や太鼓の楽器の演奏よりも、心の和楽が本当の楽などという意味である。

次に、孟子における楽では、有名な「君子の三楽」や我が身に反省して、誠実であれば、大きな楽しみなどの意義であると、論者は考えるのである。

[5] 孔子の力では、「子、怪・力・亂・神を語らず。」(述而7)などとあるように、聖人・孔子は、怪力乱神はあまり語らなかったが、それでも、その力のある武勇伝、力役、倫理や道徳哲学的な仁政を実行する力(strength)、用水路の整備に全力を尽すことや名馬は、その徳を称賛するが、一日に千里を走るという力などの意味がある。さらに、『論語』においては、「余力」の熟語も存在する。

また、堯聖・孟子における力に関しては、「聖は、譬えば則ち力なり。」(万章下)とあり、聖は、譬えば弓を引く力であり、仁徳の王者ではなく覇者の力づくや心を労する者に対しては力を労する者などの意義であると、論者は思考するのである。

ところで、なぜ孔子は、これら安、心、美、楽、さらに、力などの倫理、道徳哲学を主張したのが問題であろう。先ず、それは古代中国、周の春秋時代の状況とも関連して、聖人・孔子の偉大で規範的な人格などに基づくと言える。特に、春秋時代は、迫り来る動乱の戦国時代を控え周の天子が没落していく過程であり、孔子は、周代の王族であり文武で活躍し業績を修めた周公旦を理想的な人物として、

□□子曰く、甚だしいかな、吾が衰(おとろ)えたるや。久しいかな、吾復(また)夢に周公を見ず。(述而7)⁽⁵³⁾,

と嘆いた如く、孔子は、政策的に善き国家建設のビジョン(Vision)を持ち、その政治の実現を願望していたゆえでもあろう。

そのことは、以前の論説における孔子の仁、義、礼、知、信や愛の道徳哲学論⁽⁵⁴⁾、学、

⁽⁵³⁾ 子曰、甚矣、吾衰也。久矣、吾不復夢見周公。(述而7)。

⁽⁵⁴⁾ 拙稿「孔子の道徳哲学論—四徳(仁、義、礼、知)論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第42巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2004(平成16)年12月31日発行、1—15ページ。

道，徳，善，さらに，天の倫理哲学論⁽⁵⁵⁾，自，己，教，論，さらに，朋友などの倫理哲学論⁽⁵⁶⁾，孝，志，勇，敬，さらに，師などの倫理哲学論⁽⁵⁷⁾，前回の論説におけるこれら聖，賢，生，富，さらに，倫の倫理哲学論⁽⁵⁸⁾，はもとより，今回の論説におけるこれら安，心，美，楽，さらに，力などの孔子の倫理，道德哲学は，人間としての基本的な理念(Idee)であり，眼目であったと，論者は思考するのである。

さらに，論者のこの論文，「孔子の倫理哲学論（５）」では，ロゴス(logos)的に体系化(systematization)して，その中身を「哲学する」(philosophieren)⁽⁵⁹⁾ことを試みた。

よって，このような内容により，論者の「孔子の倫理哲学論（５）—道德論を中心として—」[Confucius' Philosophical Theory of Ethics (5)—Attaching Importance to His Theory of Morality—]の論説は，過去，現在，未来の三世に渡り，多少なりとも意義と価値があらうかと，論者は考えるのである。

………… {2009（平成21）年6月1日（月曜日），原稿提出} ……………

(55) 拙稿「孔子の倫理哲学論（１）—道德論を中心として—」（論説）『千葉商大紀要』第43巻第3号，千葉商科大学国府台学会，2005（平成17）年12月31日発行，83—99ページ。

(56) 注(6)参照。拙稿，前掲論文，「孔子の倫理哲学論（２）—道德論を中心として—」（論説），1—12ページ。

(57) 注(5)参照。拙稿，前掲論文，「孔子の倫理哲学論（３）—道德論を中心として—」（論説），1—12ページ。

(58) 注(4)参照。拙稿，前掲論文，「孔子の倫理哲学論（４）—道德論を中心として—」（論説），1—12ページ。等々。

また，拙著『哲学要論』，高文堂出版社，2006（平成18）年2月2日，5刷発行，88ページ，など。

(59) 注(1)参照。Immanuel Kant, *op. cit.*, A837, B865—A838, B866, S.752—753.

[抄 録]

孔子の倫理哲学論（５） —道徳論を中心として—

浅 井 茂 紀

この論説は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第１節孔子の安、第２節孔子の心、第３節孔子の美、第４節孔子の楽、第５節孔子の力、Ⅲ結論、から成立している論文（注付）である。孔子の安、心、美、楽や力とは何かを問題にしてみた。それらの根拠として、儒学における『論語』や『孟子』などの出典を提示して、各々の内容を分析や総合し問題にしてみたのである。

また、中国古代、周の春秋時代、孔子は、仁、義、礼、知、信や愛の哲学はもとよりのこと、学、道、徳、善、天や自、己、教、論、朋友や孝、志、勇、敬、師や聖、賢、生、富、倫の哲学だけでなく、本論では、如何に、なぜそれら安、心、美、楽、さらに、力などの倫理（Ethics）、道徳哲学（moral philosophy）を主張したのかを問題にし、吟味してみたのである。つまり、孔子の倫理哲学は、人間としての基本的な理念（Idee）ではなからうか、ということを経（logos）的に体系付けて、その意義と価値を多少なりとも考察した論説である。

—Abstract—

Confucius' Philosophical Theory of Ethics(5) —Attaching Importance to His Theory of Morality—

ASAI, Shigenori

This paper aims at clarifying Confucius' thoughts, and comprises Contents, I. Introduction, and II. Confucius' theory. The theory comprises II.1 Confucius' thoughts on ease. II.2 Confucius' mind, II.3 Confucius' perfectly beauty, II.4 Confucius' delight, and II.5 Confucius' strength. The final is III. Conclusions. (Notes appear at the end of the paper).

It hereby remains to be seen what Confucius' thoughts on ease, mind, perfectly beauty, delight, and strength, are.

As the grounds for clarification of these items, details of the individual items are analyzed and later synthesized to take them up as problems by giving sources such as Confucian Analects, The Works of Mencius, etc. in Confucianism.

At the same time, it is discussed why in Ch'un—Ch'iu period of Chou, the olden time of China, Confucius advocated ethics and moral philosophy such as Confucius' thoughts on ease, mind, perfectly beauty, delight, and strength with regard to not only benevolence, right, propriety, knowledge, sincerity, and love, but also philosophy of learning, the right way, virtue, good, heaven together with ourselves, one's self,

teaching, discourse, friends; and filial, bent, courage, reverence, teacher, and Confucius' thoughts on a sage, men of worth, life, riches, and reason, etc.

Furthermore scrutiny was also made with these matters.

That is to say, the paper intends to make observation in connection with the significance and value by systematizing them in a logostic manner with a view to explaining whether Confucius'ethical philosophy is the fundamental ideas (Idee) as a human being or not.